

第2節 五輸穴各論

1 手太陰肺經の五輸穴

1. 少商 [しょうしょう] (LU11)

【別 名】—— 鬼信 (『備急千金要方』)

【出 典】—— 『靈樞』本輸篇：「肺の脈氣は少商から出る。少商は手の母指先端の内側にあり、井木穴である」

【穴名解説】—— 「陰中に陽が生じると少から始まり、五音六律は宮・商・角・徵・羽に分類されるが、肺金の音は商であり、この腧穴が肺經の根にあたることから、少商と名づけられた」(『古法新解会元針灸学』)

【分 類】—— 手太陰肺經の井穴

【位 置】—— 手の母指末節の橈側にあり、爪の角より 0.1 寸 (指寸法) の部位。

【解剖】—— 皮膚→皮下組織→爪根

【効 能】—— 清肺利咽・醒神開竅

- 本穴は肺經の井穴であり、肺氣を調節して咳喘を止め、風熱を散解し、咽喉の通りをよくし、肺衛を疏通させるため、肺臓およびその関連器官の病変に常用される。急性の咽喉腫痛を治療するための要穴でもある。
- 井穴であることから、他に醒神開竅・啓閉回厥・泄熱止癰作用があり、昏睡・失神・ショックなどを治療するための救急穴として用いられる。その際には、その他の井穴と組み合わせて使用されることが多い。少商・商陽・中衝・関衝・少衝・少沢の 6 穴は、いずれも手指先端にあって針感および反応が強く、調節陰陽・宣通氣血・開竅蘇厥作用があり、臨床によく併用される。三稜針で点刺して出血させたり、毫針で捻轉瀉法を行ったりすれば、陽実閉鬱を原因とする昏睡・癲狂^{てんきやう}*3・癰証^{よう}*4・高熱などを治療できる。ただし各井穴は、所属する經脈によって作用にそれぞれ異なる点がある。少商は清宣肺氣・清利咽喉・疏衛解表し、商陽は清宣鬱熱・清利咽喉・解表退熱し、中衝は開竅蘇厥作用が最も強く、その他に清心安神をする。関衝は上焦の火を清除し、少陽の熱を清宣し、少衝は清心安神・宣通心氣し、少沢は清熱除煩・清宣太陽・通調乳汁する。

【主治症】—— 肺系疾患：咳嗽・精神的要因による喘証・喉痹・鼻血，肺炎・扁桃炎・咽頭喉頭炎・感冒

精神・意識障害：中風による昏睡・癲狂^{てんきやう}*3・小児の驚風^{きやうふう}*5，精神分裂病など

本經脈通過部位の疾患：手指や手首の痙攣拘急

その他：熱病・中暑による嘔吐・上腹部の満悶

【配 穴】—— 勞宮……嘔吐（『備急千金要方』）
大陵……喘逆（『備急千金要方』）
太衝・經渠……喉がゴロゴロ鳴る（『備急千金要方』）
天突・合谷……咽喉の腫痛（『針灸大成』）
曲沢……血虚による口渴（『百症賦』）
中衝・関衝……中風による昏睡
大敦……精神異常

【手 技】—— 軽く手を握り、母指を伸ばして取穴する。

① 0.1 寸直刺する。

② 太めの毫針か三稜針で点刺して出血させる。昏睡・失神・角膜炎・結膜炎・咽頭喉頭炎・扁桃炎などの治療に、この方法が常用される。

【注意事項】—— ① この部位は皮が薄く肉が少ないうえ、常に指を動かすため、癰疽灸は行わない。

② 刺針による刺激が強いため、妊婦には使用を控える。

【古典抜粋】—— ●『針灸甲乙経』第7巻：「瘧疾のような熱病で、顎を鳴らして振戦する・腹脹・斜視・喉を鳴らすなどの症状があれば、少商が主治する」「瘧疾で、寒厥あるいは熱厥・煩心・しきりにしゃっくりをする・心中満悶して発汗するなどの症状があるときは、少商から出血させればたちどころに治る」
●『針灸甲乙経』第8巻：「水に濡れたかのように寒くてしょうがない・心煩・腕のしびれ・唾を吐く・唇が乾いて水を飲みたがる・手首の拘攣・指や四肢の痛み・肺の脹満・上気・風音のような耳鳴がする・咳喘上逆・痺証・腕の痛み・嘔吐・飲食物が飲み込めない・胸腹部が鼓脹^{*6}するなどの症状は、少商が主治する」
●『備急千金要方』第30巻：「耳の前方が痛むものを主治する」
●『針灸摘英集』：「オトガイ部下方が升のように腫れ、喉が閉塞し一滴の水も入らないものは、三稜針で手太陰肺経の少商2穴から少量出血をさせる」
●『外科証治全生集』：「喉の中に龍眼ほどの大きさの物がつまっているかのように、飲み込むことも吐き出すこともできないものを梅核気という。男女ともにある証だが、少商に刺針すればよく効く」
●『針灸大成』第6巻：「オトガイ部下方の腫脹・喉のつまり・煩心・しきりにしゃっくりをする・上腹部の満悶・発汗して悪寒する・咳逆・瘧証で振寒する・腹部脹満・唾を吐く・唇が乾いて水を飲みたがる・食事を飲み込むことができない・鼓脹^{*6}・手の拘攣・指の痛み・手掌部が熱い・寒戦して歯を鳴らす・喉が鳴る・小児の扁桃炎などの症状を主治する」
●『針灸聚英』：「唐代の刺史・成君綽は、突然オトガイ部下方が升のように腫れあがり、喉が閉塞して三日間一滴の水も入らない。甄権が三稜針で刺して少量の出血をさせたところ、たちまち治った」

【現代研究】—— 脳が虚血状態になったウサギの「十二井穴」から瀉血して、脳の血流計の変化を観察したところ、血流計の振幅がすべて増大し、脳の血液循環が改

善されたことがわかった。この反応は、瀉血・疼痛刺激・腧穴の特異性などの要素があいまってたらされた結果であり、井穴のもつ救急作用のメカニズムの一端が解き明かされる可能性がある。またある観察によれば、少商への刺針は、CO₂中毒による昏睡患者の意識回復を促し、血中のCO₂ヘモグロビンの解離を促進するという。また刺針したグループと対照グループの血中CO₂含有量をそれぞれ時間をおいて測定したところ、その結果に明らかな差異があった。刺針したグループは、刺針前53.8%だった含有量が15分後には25.5%に減少したのに対し、対照グループは45%から30%に減少しただけだった。また覚醒までの時間も、刺針したグループは4.4分だったのに対し、対照グループは11分であった。

またある人が片側の少商穴に点刺したところ、喉頭部の血疱の大部分が萎縮して自覚症状が寛解し、さらにもう一方にも点刺したところ、血疱すべてが吸収され、自覚症状が消失したという。そして以上の全過程が4～5分であったとのことである。その他にも、少商穴だけを用い、何回治療しても効果のなかった鼻血・小児の重症肺炎・しゃっくりなどを治療して効果をあげている。そのうち鼻血の治療をするときには、その手技がきわめて重要である。患者に姿勢を正して座らせ、目はまっすぐに前を向かせる。そして「息を吸う―息を止める―咳をする」という一連の動作を同じリズムで繰り返させ、患者が咳をしようとした瞬間に、針と指の爪の辺縁部を平行にし、しかも爪を30°の角度にして、すばやく0.1～0.5寸刺入する。置針はしない。垂直に点刺したり、息を吸っているときに刺針したりしても、まったく効果がない。

2. 魚際 [ぎょさい] (LU10)

【別 名】―なし。

【出 典】―『靈樞』本輸篇：「肺……魚^{なが}際に溜れる。魚際は母指球にあり、榮穴である」

【穴名解説】―「魚際は、手の母指の内側で、中手指節関節上方の魚の腹のようになっていところの辺縁部にあることから、魚際と名づけられた」（『古法新解会元針灸学』）

【分 類】―手太陰肺経の榮穴

【位 置】―手の母指の、第一中手指節関節上方の陥凹部にあり、第一中手骨のほぼ中間点の橈側で、手背部と手掌部の境目にある。

【解剖】―皮膚→皮下組織→短母指外転筋→母指対立筋→短母指屈筋
浅層部には正中神経掌枝と橈骨神経浅枝などが分布している。深層部には、正中神経筋枝や尺骨神経筋枝がある。

【効 能】―清熱涼血・疏肺利咽

- 本穴は肺経の榮火穴であり、「榮は身熱を主る」といわれるように、清肺熱・瀉火邪・利咽喉および滋肺陰・涼血止血的作用がある。肺の実火、虚熱を原因とする咽喉の疼痛、痰の少ない咳嗽などに効果がある。

●理気の要穴として、上焦の気を疏通させる作用もある。

【主治症】——肺系疾患：咯血・失声症・喉痹・喉の乾き、**国**気管支炎・肺炎・扁桃炎・咽頭炎・鼻炎

熱性病：身熱・頭痛・乳腺炎・手心部の熱

本経脈通過部位の疾患：肘の拘攣・指の痛み

その他：目のくらみ・腹部脹満・腹痛・食べ物が飲み込めない、**国**動悸・小児の単純性消化不良

【配 穴】——太淵・大都・太白……熱病で発汗しているもので、脈が正常ならば発汗してよい（『靈枢』熱病篇）

太淵……厥心痛^{*7}で動くと痛みが激しくなる（『靈枢』厥病篇）

尺沢……血液混じりの唾を吐く（『針灸甲乙経』）

少商・公孫・解溪・至陰・完骨……頭痛・煩心（『針灸資生経』）

列欠・少沢・欠盆……咳嗽（『針灸資生経』）

合谷・間使・神門・肺俞・腎俞……失声症（『針灸集成』）

合谷……咳嗽・咽喉の腫痛・失声症

孔最・中府……哮喘^{*8}

【手 技】——手首を曲げて掌心と向かいあうようにし、軽く握ったような状態にする。

①0.5～0.8寸の直刺。重だるく腫れぼったくしびれるような針感を刺針部から母指まで放散させる。

②三稜針で点刺して出血させるか挑治療法を施す。

【注意事項】——この部位は常に外に露出しているうえ、よく動かすため、癰疽炎は行わない。

【古典抜粋】——●『針灸甲乙経』第7巻：「寒厥・熱病・心煩・少氣して息ができない・陰部が湿ってかゆい・腹痛・飲食物がとれない・肘の拘攣・四肢の脹満・喉がひどく乾燥して渇くなどの症状は、魚際が主治する」「熱病で寒戦して歯を鳴らす・腹部脹満・インポテンツ・咳をすると臀部にまで響いて尿を漏らすなどは、虚証である。胸膈内部が虚す・飲食してもすぐ嘔吐する・身熱・発汗しない・しきりに唾を吐く・下血・肩背部が悪寒したり発熱したりする・顔に色艶がない・涙が出るなどもみな虚証である。魚際に刺針して補う」

●『針灸甲乙経』第9巻：「息切れ・心痺・悲しんだり怒ったりする・逆気・怒りから発狂するなどは、魚際が主治する」

●『針灸甲乙経』第11巻：「胃逆・霍乱は、魚際が主治する」

●『備急千金要方』第23巻：「産後は常に乳を絞り出しておかなければならないのに、ためてしまうと凝結して出なくなり……妬乳^{とにゅう}^{*9}になるが、これは癰ではないので、すぐに両手の魚際にそれぞれ27壯灸をすえる」

●『針灸聚英』：「酒による疾病・悪風・悪寒・虚熱・舌の上が黄色い・身熱・頭痛・咳嗽・しゃっくり・傷寒で発汗しない・痺痛が胸背部を走り息ができない・目のくらみ・心煩・少氣・腹痛があり食べることができない・肘の拘攣・四肢の脹満・喉の乾燥・寒戦して歯を鳴らす・咳をすると臀部まで響いて痛む・血尿・血液混じりの嘔吐・心痺・悲しんだり恐がっ

たりする・乳腺炎などを主る」

【現代研究】——放射免疫測定法を行ったところ、喘息発作を起こしている患者は、正常な対照グループよりも、血漿中のサイクリックアデノシンーリン酸含有量が明らかに低下している ($P < 0.05$) ことがわかった。またモルモットに喘息を誘発させると、その肺組織内のサイクリックアデノシンーリン酸含有量も対照グループ（喘息を発症していない）よりも低下していた ($P < 0.01$)。血漿と肺組織中のサイクリックグアノシンーリン酸が対照グループよりも増加していたが、これは統計学上有意ではない。ただ喘息発作は、血漿および肺組織中のサイクリックアデノシンーリン酸量が減少したと何らかの関係があることを示唆している。

魚際にて2週間刺針を続けたところ、血漿中のサイクリックアデノシンーリン酸含有量およびサイクリックアデノシンーリン酸のサイクリックグアノシンーリン酸に対する比率が刺針前よりも明らかに上昇し、両者には明らかな相関性 ($P < 0.001$, $P < 0.002$) が認められた。また臨床症状が明らかに改善され、喘鳴音が消滅し、肺の最大換気量が増加した。

動物実験によれば、膈穴以外の部位に刺針したモルモットのグループに比べ、「魚際」に刺針したグループは、肺組織中のサイクリックアデノシンーリン酸含有量およびサイクリックアデノシンーリン酸のサイクリックグアノシンーリン酸に対する比率が、明らかに高かった ($P < 0.05$)。しかも「魚際」局所にプロカインブロックをして刺針効果を消滅させたグループは、肺組織中のサイクリックアデノシンーリン酸含有量およびサイクリックアデノシンーリン酸のサイクリックグアノシンーリン酸に対する比率が、「魚際」に刺針したグループに比べ、明らかに低く ($P < 0.01$, $P < 0.05$)、喘息発作を起こしているグループに近かった。このことは、「魚際」穴が肺臓のサイクリックアデノシンーリン酸に影響を及ぼす独自の機能をもっていることを示すものであり、また喘息に対して刺針治療したときに起きる経絡や経穴を調整する作用は、神経液を介して実現されている可能性があることを物語っている。

また魚際への刺針は、肺の呼吸機能を改善し、呼吸を安定させることができる。

3. 太淵 [たいえん] (LU9)

手太陰肺経の原穴であり輪穴であり、八会穴の脈会穴でもある。
第6章第2節の八会穴各論（236頁）を参照。

4. 経渠 [けいきょ] (LU8)

【別名】——なし。

【出典】——『靈樞』本輸篇：「肺……経渠に行く。経渠は寸口の脈の中にあり、動き続

けて止まることがない。経穴である」

【穴名解説】—「水が流れ出て渠をゆるやかに流れるように、血気は井穴から流れ出てここに至り、ゆっくりと経穴まで導かれる。これが十二経脈である。渠とは溝のことであり、十二経脈の気血がこの腧穴に流れ込むことから、経渠という」（『黄帝内経明堂』）

【分類】—手太陰肺経の経穴

【位置】—前腕の前側で、橈骨茎状突起と橈骨動脈との間の陥凹部で、手首の横紋の1寸上方。

【解剖】—皮膚→皮下組織→腕橈骨筋腱の尺側縁→方形回内筋
浅層部には外側前腕皮神経と橈骨神経浅枝が分布している。深層部には橈骨動脈と静脈がある。

【効能】—宣肺清熱・止咳平喘

- 本穴は肺経の経金穴であり、「経穴は喘咳寒熱を主る」という特徴があるうえに、五行属性が肺臓と同じ「金」であるため、宣肺清熱・止咳平喘作用が最も強い。
- 消腫止痛効果もあり、咽喉腫痛や胸背部痛にも使用できる。

【主治症】—肺系疾患：咳嗽・精神的要因による喘・喉痹、**国**気管支炎・咽頭炎・扁桃炎
胸部疾患：胸部脹満・胸背部痛、**国**食道痙攣
本経脈通過部位の疾患：手心部の熱
その他：脈なし病

【配穴】—丘墟……胸背部が引きつり、胸中が膨満する（『備急千金要方』）
行間……しきりに咳をする（『備急千金要方』）
丘墟・魚際・崑崙・京骨……背部痛（『針灸大成』）

【手技】—掌を上に向けて取穴する。
0.2～0.3寸直刺し、刺針部から前腕まで腫れぼったいだるさを放散させる。

【注意事項】—①橈骨動脈を避けて刺針する。
②橈骨動脈に近いため、癰痕灸は行わない。

【古典抜粋】—●『備急千金要方』第30巻：「経渠は、咳逆上気・喘息・掌の熱を主治する」
●『針灸大成』第6巻：「瘧証の悪寒発熱・胸背部の拘急・胸満・喉痹・手心部の熱・咳逆上気・しきりにあくびをする・傷寒の熱病で汗が出ない・突然の瘧証・喘息・心痛・嘔吐などを主治する」

【現代研究】—ある人が頸部捻挫に経渠1穴を用い、一側の疼痛には患側を、両側の疼痛には両側を取穴したところ、100%の有効率であった。

5. 尺沢【しゃくたく】（LU5）

【別名】—鬼受（『備急千金要方』）・鬼堂（『千金翼方』）

【出典】—『靈樞』本輸篇：「肺……尺沢に入る。尺沢は肘の中の動脈であり、合穴である」

【穴名解説】—「骨度法では、手首から肘までを1尺と定めており、『腧穴折衷』には『尺